

研究ノート

プレパレーション検討会に参加した総合病院小児病棟の看護師の認識の変化

Changes in the Awareness of General Hospital Pediatric Ward Nurses who Participated Preparatory Investigational Conferences

平田 美紀¹⁾*, 流郷 千幸¹⁾, 鈴木 美佐¹⁾,

Miki Hirata, Chiyuki Ryugo, Misa Suzuki,

古株 ひろみ²⁾, 川端 智子²⁾, 玉川 あゆみ²⁾

Hiromi Kokabu, Tomoko Kawabata, Ayumi Tamagawa

キーワード 総合病院, 小児病棟, プレパレーション, 検討会

Key Words general hospital, pediatric ward, preparation, workshop

抄 録

背景 小児看護において、プレパレーションの概念が急速に広まる中、総合病院の看護師のプレパレーションに関する認知には差がみられている。また、親を含めたプレパレーションの必要性は認識が低い。そのため、子どもと親への援助が実施されていない現状がある。

目的 総合病院小児病棟で子どもの採血に関わる看護師を対象に、プレパレーション検討会を開催し、参加した看護師の認識や病棟での取り組みの変化を明らかにする。

方法 対象は、A県内の総合病院に勤務する看護師7名。検討会を合計4回開催した。検討会の逐語録を分析し、参加者の思いと施設の現状を要約した。

結果・考察 検討会の参加者は、プレパレーションに対して高い関心を持っており、さらに学習を深めたいと感じていた。また、複数の施設が参加することで、所属病棟のプレパレーションの現状を再確認し、今後の課題を見出すことができた。

結論 総合病院小児病棟では、プレパレーションの必要性を認識し、プレパレーションが実施できている部分もあるが、看護師の認識の統一が困難な現状が明らかとなった。プレパレーションに対する関心が高い参加者が、複数の施設から集まる検討会は、参加者個人の意欲向上を図り、さらに施設において効果的な働きかけにつながる。

Abstract

Background Differences in general hospital nurses' awareness of preparation are coming to light amidst the rapid spread of the concept of preparation throughout the field of pediatric nursing. There is a low level of awareness of the need for preparation that includes parents. Support for children and parents is thus inadequate.

Purpose The aim of this study is to elucidate changes in nurses' awareness and in ward initiatives by holding preparatory investigational conferences with nurses involved in collecting blood from children on pediatric wards of general hospitals.

Methods Subjects comprised seven nurses working at general hospitals in A Prefecture. A total of four investigational conferences were held. Transcriptions of the conferences were analyzed and nurses' thoughts and the state of the facility were summarized.

Results and Discussion Nurses who participated in the investigational conferences had a strong interest in preparation and wanted to deepen their learning of this concept. Furthermore, the participation of nurses from multiple facilities allowed for the state of preparation on each ward to be re-examined and future issues to be identified.

Conclusions Nurses on pediatric wards of general hospitals were aware of the need for preparation and thus employed it. However, results revealed that at present, it is difficult to standardize nurses' awareness of preparation. Investigational conferences where nurses from multiple facilities with a strong interest in preparation gather increase motivation in individual participants and lead to effective intervention at facilities.

¹⁾ 聖泉大学 看護学部 看護学科 School of Nursing, Seisen University

²⁾ 滋賀県立大学 人間看護学部 人間看護学科 School of Human Nursing, The University of Shiga Prefecture

* E-mail hirata-m@seisen.ac.jp

I. 緒 言

わが国が、1994年に子どもの権利条約を批准し、小児看護において、子どもの権利を重要視したプレパレーションの概念が浸透した。その後、プレパレーションに関する研究は、2000年頃から急増し（平田、2013）、プレパレーションの実践やその効果に関する報告が多くみられた。また、子どもの検査・処置への親の参加に関する報告は、2005年以降見られ始め、検査・処置を受ける子どもに親が付き添うことが重要視されてきた。しかし、これらの先行研究は、小児を対象とする専門病院や小児病棟の看護師からの報告が多く見られた。

研究者らが2006年に行った調査では、プレパレーションを認知している看護師は4割であったが、2012年、2013年に行った全国調査では、総合病院小児科外来に勤務する看護師の認知は5割で（鈴木ら、2012）、小児病棟に勤務する看護師の認知は8割（鈴木ら、2013）であり、プレパレーションの認知が広がってきていることがわかる。しかし、その内容としては、小児科外来と小児病棟などの勤務部署によって認知に差があることや、援助の内容として親の付き添いの必要性の認識が低いことが明らかになった。プレパレーションとは、病気や入院によって引き起こされる子どもの様々な心理的混乱に対し、医療者が準備や配慮を行い、子どもの対処能力を引きだし、その影響を緩和するような支援である（及川、2006）。そのような支援を行うためには、小児と関わる看護師がプレパレーションを正しく理解することや、具体的な実践方法を知る必要がある。

そこで研究者らは、総合病院に勤務する看護師のプレパレーションの認識の向上を図ることを目指し、プレパレーション検討会の開催を行うこととした。プレパレーション検討会に参加した看護師の認識や病棟での取り組みがどのように変化したのかを明らかにする。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

本研究は、アクションリサーチのミューチュアルアプローチの方法を用いた。ミューチュアルアプローチは、研究者と現場の人も同等の立場にあ

り、現場の問題を明らかにするときは、互いの了解による意思決定をしながら、現場の人が目指したいことに焦点を当てて研究を進める方法である（筒井、2011）。そのため、研究者は検討会のメンバーとしての立場で参加した。

2. 研究対象

A 県内の総合病院小児病棟に勤務する看護師

3. 研究期間

平成25年4月～平成26年3月

4. 研究対象者の募り方

A 県内の医療施設の施設長宛てに、検討会の概要、対象、開催回数等について記載した検討会参加のお願いを送付した。各施設に、検討会のポスターを提示し、プレパレーションに関心を持つ希望者を募り、申し込みを依頼した。その際、検討会のメンバーの所属、検討会の内容を学会等で報告する可能性があることを記載しておいた。

5. プレパレーション検討会の開催内容

検討会は、「A 県子どものプレパレーション検討会」（以下検討会とする）とし、原則的に3か月に1回、2時間程度を計4回の開催とした。検討会のメンバーは、看護系大学の小児看護を専門とする研究者6名とプレパレーションに関心を持つ参加者で構成した。

検討会の内容は、施設の状況把握と研究者からの情報提供をセッション1～4に分類した。セッション1では、検討会に参加した参加者の思いの確認を主な内容とし、研究者と参加者が本音で語り合える土壌作りとした。研究者からは、子どもの権利およびプレパレーションについての講義、子どもの採血場面のDVD視聴を情報提供した。セッション2では、各施設におけるプレパレーションの実施状況とその効果の報告とし、病棟で実際に使用されているものを持ち寄り紹介した。研究者が行った「総合病院に勤務する看護師のプレパレーション認知に関する研究」の研究成果を情報提供した。セッション3では、検討会に参加してから各施設の変化およびプレパレーションを病棟に普及する際の困難感、看護系大学の小児看護学で行うプレパレーションについての紹介を提供した。セッション4では、研究者が行った「総

合病院において子どもの採血に関わる看護師の採血時の援助に関する認識」の研究成果の情報提供と、参加者の全4回の検討会を通しての振り返りを行った。

6. データ収集方法

検討会の参加者であるプレパレーションについて関心のある看護師が、互いに忌憚なく発言できる利点を生かしたFocus group interviewとした。検討会は、参加者のプライバシーが守れる公的機関の会議室で行い、日程は参加者の勤務に支障がない日を設定した。司会進行は研究者が担い、検討会の参加者がリラックスできるように、お茶を準備し、座席は全員の顔を見渡せるように設定した。研究者らは、ファシリテーターであると共に、参加者の語りを聴き、自らも思いを語るメンバーとして参加した。また司会者は、参加者の精神的な負担および語りの誘導にならないように留意した。会話の内容は、参加者の承諾を得て、参加者の発言をその場で一語一句記録した。

7. 分析方法

検討会の記録から逐語録を作成し、検討会参加者のプレパレーションに関して語られたものを抽出した。さらに参加者の思いと施設での実施について要約した。要約にあたっては、小児看護専門領域の研究者で検討した。

8. 倫理的配慮

研究対象者に対して、研究目的と方法、参加は自由意思であること、得られた結果は、学会等で公表する可能性があることを文章と口頭で説明し承諾を得た。本研究は、平成23～26年度科学研究費補助金（基盤研究（C））による「総合病院外来において医療処置を受ける子どもと親へのプレパレーションモデルの開発」（研究課題番号23593347）の助成研究の一部で、聖泉大学倫理審査委員会の承認を得た（承認番号：7）。

III. 結 果

1. 参加者の概要

検討会参加者は、A県内の総合病院のうち、病床数200～500床の5施設から参加があった。そのうち、全4回の検討会を通しての参加者は、病床

数450床のA施設から経験年数が2～3年目の看護師3名、病床数200床のB施設から経験年数13～20年目の看護師2名、病床数400床のC施設から経験年数3～20年目の看護師2名の計7名であった。

2. 総合病院小児病棟の看護師のプレパレーションに関する認識

総合病院小児病棟に勤務する看護師を対象に開催した検討会の内容と参加者の認識の変化について表1にまとめた。

1) セッション1における参加者の認識

セッション1では、検討会の目的、子どもの権利およびプレパレーションの定義について研究者から情報提供した。検討会に参加した参加者からは、プレパレーションに関する認識を確認した。

セッション1-①1)「混合病棟であり小児だけに向き合う機会が少ない」、セッション1-①2)「子どもへの説明を行っていなかった」、セッション1-①3)「小児患者に対する術前の説明に大人と同じパンフレットを使用している」、セッション1-①4)「病棟としてできていない」、セッション1-①5)「学生時代から興味があったが病棟ではできていない」などのように、参加者はプレパレーションに関心を持っているが、総合病院小児病棟ではプレパレーションが十分にできていないため検討会に参加して情報を得たいという思いを持っていた。

また、各施設のプレパレーションの状況は、セッション1-④1)「看護師個人の認識の差が大きい」、セッション1-④2)「処置への親の付き添いは全くできていない」、セッション1-④3)「採血・手術・病棟についての説明パンフレットを作製した」、セッション1-④4)「子ども用の説明用紙はない」、「子どもに言ってもわからないから説明していなかった」、セッション1-④5)「手術の流れを説明する冊子を利用」、セッション1-④6)「採血場面におけるプレパレーションを行っている」、セッション1-④7)「子どもが嫌いな看護師もいる」、セッション1-④8)「親にプレパレーションの目的や成果について正しく伝えることが大切」などのように、採血や手術のプレパレーションを行っている施設もあるが、子どもに説明するパンフレットなど視覚的に伝えるツールがない、パンフレットを作成しただけ、看護師の

表1 プレパレーション検討会におけるセッションの内容と参加者の認識

	内容	要約
セッション1	①検討会に参加した参加者の思いの確認	
	1) 混合病棟であり小児だけに向き合う機会が少ない、病棟でプレパレーションの係を担っているため、検討会に参加して情報を得たい。(A)	参加者はプレパレーションに関心を持っているが、総合病院小児病棟ではプレパレーションが十分にできていないため検討会に参加して情報を得たい。
	2) 小児患者の場合も母親に説明することが多く、子どもへの説明を行っていなかった。一般病棟でできることに取り組みたい。(B)	
	3) 子どもへのプレパレーションに関する研究を行っている。外科病棟に入院する小児患者に対する術前の説明に大人と同じパンフレットを使用していることに疑問をもった。(B)	
	4) 子どもへのプレパレーションについて、興味は持っているが病棟として出来ていない。プレパレーションの評価は難しいと考えている。学生・スタッフの意識を変えたい。(C)	
	5) 学生の時からプレパレーションに興味があった。しかし病棟ではプレパレーションは実施できていない。(C)	
	②子どもの権利およびプレパレーションの講義	
	③母親が付き添う2歳児の採血場面のDVD視聴	
	④各施設のプレパレーションの現状	
	1) 子どもの手術室入室の際には、手術室看護師が“怖くないように”と工夫を行っているが、病棟はなにも行えていない。子どもに対する関わりは、看護師個人の差が大きい。統一した関わり方やモデルが必要。子どもへの言葉がけは行えたとしても、パンフレットや資料など視覚的に訴える資料がない。(A)	採血や手術のプレパレーションを行っている施設もあるが、子どもに説明するパンフレットなど視覚的に伝えるツールがない。パンフレットを作成しただけ、看護師の認識の差がある。親への支援ができていないという施設もある。
	2) 親によっては子どもの処置を見るのがかわいそうという人もいる。親が処置に付くのか付かないのか、どちらがよいのかと思う。付き添いは全くできない。(A)	
	3) 全く取り組みを行っていなかったため、採血・術前の流れ・病棟の説明に関するパンフレットを作製した。(B)	
	4) 子ども用の説明用紙はない。子どもの手術入院の際、子どもに対しては言ってもわからないからと説明していなかった。子どもができることを母親にも伝えていく必要もある。(B)	
	5) 小児外科患者に術前のプレパレーションを実施していた。キワニスドールや手術前後の流れを説明する冊子を利用していた。(C)	
	6) 採血場面におけるプレパレーションを行っている。年齢・性別毎にパンフレット(絵・写真入り)を作成し、説明に用いている。採血時の希望する体位(抱っこ・座位・臥位)や持ちこみたいものを採血前に聞いている。(C)	
	7) 総合病院では、小児病棟のスタッフであっても子どもが嫌いな看護師もいる。スタッフの関心を高めるために、どのように進めていけばよいのが課題。プレパレーションの目的・必要性を理解できた。病棟全体で理解できるようにしていきたい。(C)	
	8) 親によってはプレパレーションを行うことで子どもに恐怖を感じさせたと訴えることもある。そのような場合も、親にプレパレーションの目的や成果について正しく伝えていくことが大事だと思う。(C)	
セッション2	①各施設のプレパレーションの紹介	
	1) 採血を受ける児に対し説明を行うパンフレット、採血終了後に貼る絵が描かれた止血テープ、吸入を行う児に対し説明を行うパンフレット、持続点滴によるシーネ固定をしている児のカラフルな包帯の紹介。採血のパンフレットは主に手順が書かれている。吸入の布製絵本があるが上手く活用できていない。(A)	採血、吸入、手術を受ける子どもに対して、パンフレット、ディストラクションツール、キワニスドール、医療器具などを用いてプレパレーションを行っている。しかし、発達段階に応じたプレパレーションが行えていないと感じる。
	2) 採血は医師のタイミングで行うので、子どもや親に説明するタイミングがつかめず、子どもがやる気になるまで待つことが難しい。保護者の同室は無く、処置室の前のソファで待ってもらっている。(A)	
	3) 外科病棟で使用している4-6歳児向けの耳鼻科の手術を行う子どものための説明用パンフレットの紹介。色をつけないパンフレットにすることで、子ども自身が塗り絵など楽しめるように工夫している。また、余白も多く取ってあり自由に絵を書いてもらうこともできる。入院時にデジタルカメラで子どもと家族の写真を撮影し、パンフレットの表紙に貼ることで、自分だけの大切なパンフレットという意識を持ってもらえるように工夫している。(B)	
	4) 6歳児など年長児になると興味を示してもらえない児もいるため、個別性に合わせたパンフレット作りが必要である。(B)	
	5) 採血に保護者は同室してもらっている。横に付き添ってもらう場合や、保護者が抑制する場合もある。(B)	
	6) 4歳児～の採血を受ける児に対し説明を行うパンフレット、処置室の飾り付けの紹介、DVD、CD、絵本、人形などのディストラクション方法の紹介。手術を受ける児に対する説明を行うアルバム、ごっこ遊びができる医療玩具、キワニスドールの紹介。採血を受ける児に対し、採血する前に病室でパンフレットを用いて説明する。児が準備できたら採血を実施している。(C)	
	7) 手術前には、アルバムと医療玩具を用いてプレパレーションを実施する。キワニスドールは絵を書いてもらい、児と一緒に手術室に持って行っている。このパンフレットは4歳以上の児に説明することを想定している。(C)	
	8) 最初は採血係が1人だけだったが、2人に増やし4歳以上の児は、看護師だけで採血できるようにした。4歳以上の児は保護者に付き添ってもらって、ディストラクションをしてもらっている。3歳以下は医師の許可が下りず、同室でできていない。研修医が採血を行うことが多く、研修医のプレッシャーになると言う理由から同室の許可がでない。(C)	
	②各施設のプレパレーションの効果	
	1) パンフレットを作製したが、スタッフの意識の統一がまだ行われていない。混合病棟という特徴からも、子どものためだけに集中して何かをやるのは難しい雰囲気がある。(A)	4～6歳の発達段階にはプレパレーションの効果はある。また採血のプレパレーションは継続して行っている施設もあるが、スタッフの意識の統一はできていないと感じる。
	2) パンフレットは4-6歳の児には効果があると思う。説明する時は保護者も一緒に聞いてもらっている。(B)	
	3) 採血に関しては上手くいっていると思う。(C)	

	内容	要約
	③第2回に参加してのリフレクション	
	1) 吸入のプレパレーションのアドバイスをもらったので、実践していきたいと思う。他の施設のツールを見て、プレパレーションのイメージができた。ぜひ参考にしていきたい。(A) 2) 様々な意見やツールを見て勉強になった。来年に向けてここで知識を深めて、少しずつ広めたい。ここで学んだことをスタッフに伝え、スタッフ全員で興味を持って取り組めるようにしたい。(B) 3) プレパレーションに関する看護研究をしているのでとても参考になった。他の病院のツールを知ることができた。もっとスタッフ全員で頑張っていきたい。(C)	他施設のプレパレーションの状況を知ることができ、実際に学ぶことができた。 病棟スタッフへ伝えていきたいと思った。
	④「総合病院に勤務する看護師のプレパレーションの認知に関する研究」の報告	
	①検討会に参加してからの各施設の変化	
セ ッ シ ョ ン 3	1) 吸入のプレパレーションの説明内容が、看護師によって違うため、吸入器に説明のカードをつけたり、病棟会で意識の統一をおこなった。(A) 2) 採血のパンフレットはあるが、実施できていない。採血は医師のタイミングで実施されているため、なかなかプレパレーションが実施できない。(A) 3) 子どもが苦手なスタッフもいるため、できるだけ導入してもらいやすいように、はじめからパンフレットのストック棚を用意して使いやすくしている。(B) 4) 吸入のプレパレーションのツールを保育士と共同で作成したが、どのような場面で使用したらよいかわからないため、若年層を対象に広めていっている。(C) 5) プレパレーション検討会のことを病棟全体に広げられるように勉強会を考えている。(C)	病棟スタッフへ情報提供したり、勉強会の企画をしている施設もあるが、医師の協力が得にくくプレパレーションが進まないという施設もある。
	②各施設の病棟に広める際の困難感	
	1) 経験年数が若いスタッフや、少人数のものが伝えても、否定的ではないが積極的にしてくれる様子はなかった。(A) 2) プレパレーションを学生時代に学んでいない年代のスタッフもいる。実施に関しては、どちらかというと継続して日勤務であるパートさんに頼っていることが多い。(B) 3) 経験年数があるスタッフは、管理業務が多く、会議に参加したりしていると勉強会に参加できないことが多いため勉強会が成り立たない。(C)	病棟スタッフの協力が得られていない、看護学生の時期にプレパレーションについて学んでいない看護師もありプレパレーションがなかなか進まない。
	③看護系大学の小児看護学で行うプレパレーションについての紹介	
	①「総合病院において子どもの採血に関わる看護師の採血時の援助に関する認識」の研究報告	
	②全4回に参加してのリフレクション	
セ ッ シ ョ ン 4	1) テキストの資料を見て「今の学生は、こんなことを勉強して、これが当たり前だという考えで就職してくるということを理解しておかなければいけないね。」という反応がみられた。(A) 2) 学生時代に学んでおり、テキストの資料をスタッフが見ている姿から、プレパレーションは浸透してきているのだと実感した。(B) 3) 自分たちはプレパレーションを学んでこなかったが、これからの学生は学んで入ってくる。それを理解した上で新人を迎えないといけないという意見が聞かれた。(C) 4) まずプレパレーションの周知から始め、勉強会をした。いきなり採血にすると医師を巻き込んでしまうことになるので、まずは吸入から始めた。吸入のプレパレーションもなかなか浸透しなかったが、「今年はプレパレーションをしないといけないんだ」という雰囲気を出しつつすることで、プレパレーションに対する意識を変えていくことができた。(A) 5) 学生時代にプレパレーションを学んだ世代のスタッフを集めてチームを作ってもらえるようお願いしている。(A) 6) この会に参加して、他の病院の現状を周囲に発信していくことで、病院全体がプレパレーションに目を向けてくれるようになった。(A) 7) スタッフ全員が同じ意識や知識レベルで対応していかないと意味がないので、まずは看護師から頑張っていきたいという準備段階。(A) 8) プレパレーションについて、学んでいく機会があるようなら、自分が学んで来たことを還元していきたいと思っている。(B) 9) 医師自身が効果を感じ始めている。プレパレーションの必要性や方法の勉強会を実施した。(C) 10) 検討会に参加し、プレパレーションのチームとして引き続き活動していく。(A) 11) 採血のプレパレーションを進めていく。(A) 12) プレパレーションを広めていくために、検討しながら今後も研究を行っていきたい。(B) 13) プレパレーションについて、親は全員やってもらって良かったと言ってくれているが評価が難しい。評価をどのようにしていこうかを悩んでいる。(B) 14) 学生が実習で実施したプレパレーションは効果的であったので、スタッフもやるべきだと考えている。(B) 15) 興味を持ってくれる人もいたが、やる気に個人差が大きいので、全員が意識して最低限のことは実施していけるようにしていきたい。(C) 16) 最初は嫌がって泣いていた子どもが、この一年で、自ら歩いて手術室まで行き、名前を言えるようにまでなった。その姿をみて、スタッフも涙するぐらい感動していた。このことで、病棟にはかなり意識づけになったと思う。このようにスタッフみんながもっとプレパレーションが重要であるということ解ってもらえるように働きかけることが今後の課題だと思っている。(C) 17) 病棟だけで、外来まではなかなか勉強会などもできていない。(C) 18) 医師が採血中に看護師がディストラクションしていて、医師がやりやすかったりしたこともあり、その積み重ねから歩み寄れた。看護師だけでなく、他職種がプレパレーションを理解していかなければいけないと思う。(C)	各施設において、参加者からの情報提供により病棟スタッフや医師の認識の変化がみられた。 今後も継続して勉強会などの活動をしていきたい。 プレパレーションの評価や医師や保育士などの他職種と協同して行う必要性を感じた。 小児病棟だけではなく、子どもに関わる外来看護師への働きかけも必要である。

認識の差がある、親への支援ができていないという施設もあった。

研究者からの講義は、子どもの権利およびプレパレーションの講義を行った。参加者からは、処置後にプレパレーションを取り入れる必要性が理解できたが、具体的にどのような方法を行うとよいのか、また入院期間によっても、子どもとの関係性が違うため難しさがあるという意見が聞かれ、その都度研究者から助言した。

2) セッション2における参加者の認識

セッション2では、病院各施設におけるプレパレーションの実施状況とその効果について報告してもらい、研究者から「総合病院に勤務する看護師のプレパレーションの認知に関する研究」の研究成果を情報提供した。

セッション2-①1)「採血の説明用パンフレット」「吸入の布製絵本」、セッション2-①3)「耳鼻科の手術の説明用パンフレット」、セッション2-①6)「ディストラクションの紹介」「ごっこ遊びができる医療用玩具」「キワニスドール」などのように、採血、吸入、手術を受ける子どもに対して、パンフレット・ディストラクションツール・キワニスドール・医療用玩具などを用いてプレパレーションを行っている。しかし、セッション2-①4)「年長児になると興味を示してもらえない」、セッション2-①7)「パンフレットは4歳以上の児に説明することを想定している」などのように、発達段階に応じたプレパレーションが行えていないと感じていた。

セッション2-②1)「パンフレットを作成したがスタッフの意識の統一が行われていない」、セッション2-②2)「4～6歳の児には効果がある」、セッション2-②3)「採血に関しては上手くいっている」などのように、4～6歳の発達段階にはプレパレーションの効果はある。また採血のプレパレーションは継続して行えている施設もあるがスタッフの意識統一ができていないと感じていた。

セッション2-③1) 3)「他施設のツールを見てプレパレーションのイメージができた」「参考にしたい」、セッション2-③2)「検討会で学んだことをスタッフへ伝え、スタッフも興味を持って取り組めるようにしたい」などのように、他施設のプレパレーションの状況を知ること、実際に学ぶことができた。病棟スタッフへ伝えて

いきたいと感じていた。

研究者からの講義は、研究者が全国調査で行った「総合病院小児外来・小児病棟で子どもの採血に関わる看護師のプレパレーションに関する認知に関する研究」の研究成果を報告した。プレパレーションの用語は急速に広まったが、正しく理解されていない実態があることを共有することができた。

3) セッション3における参加者の認識

セッション3では、検討会に参加してからの各施設の変化およびプレパレーションを病棟に普及する際の困難感、看護系大学の小児看護学で行うプレパレーションについての紹介を提供した。

セッション3-①1)「病棟会で意識の統一を行った」、セッション3-①2)「医師のタイミングに合わせるためなかなか実施できない」、セッション3-①3)「パンフレットを棚に整理し使いやすくした」、セッション3-①4)「若年層のスタッフを中心に広めていっている」、セッション3-①5)「病棟へ広めるため勉強会を考えている」などのように、病棟スタッフへ情報提供したり、勉強会の企画をしている施設もあるが、医師の協力が得にくくプレパレーションが進まないという施設もあった。

セッション3-②)「スタッフは否定的ではないが積極的でもない」、セッション3-②2)「学生時代にプレパレーションを学んでいない年代のスタッフもいる」、セッション3-②3)「経験年数が多いスタッフは会議等があり勉強会に参加できないことが多い」などのように、病棟スタッフの協力が得られないことや、看護学生の時期にプレパレーションについて学んでいない看護師もいるためプレパレーションが進まないことを感じていた。

研究者からは、看護系大学で使用しているテキストから、プレパレーションに関するページを資料として配布し、研究者から小児看護学のプレパレーションについて講義内容を紹介した。また、小児看護学実習において、学生が作成したプレパレーションのパンフレットを紹介した。参加者は、学生が講義で学んだ知識を小児看護学実習において、実施可能なレベルにまで完成させていることに驚き、小児病棟でのプレパレーション場面を学生へ見せることや、体験することの重要性を感じていた。

4) セッション4における参加者の認識

セッション4では、「総合病院で子どもの採血に関わる看護師の採血時の援助に関する認識」の研究報告、検討会全4回の振り返りと次年度への課題を確認した。

セッション4-②1)3)「学生の時にプレパレーションを学んで就職してくることを理解しておくことが必要」、セッション4-②2)「プレパレーションは浸透してきている」、セッション4-②5)「学生時代にプレパレーションを学んだスタッフでチームを結成する」、セッション4-②6)「病院全体がプレパレーションに目を向けてくれるようになった」、セッション4-②7)「まずは看護師から理解してもらう準備段階」、セッション4-②9)「プレパレーションを体験した医師自身が効果を感じ始めている」、セッション4-②10)11)12)「プレパレーションの取り組みを引き続き活動していく」、セッション4-②13)「プレパレーションの評価が難しい」、セッション4-②14)「学生の実習で効果があるものは参考にしたい」、セッション4-②15)「スタッフの認識の差があるため全員が最低できることをしていきたい」、セッション4-②16)「プレパレーションの重要性を伝えていく」、セッション4-②17)「小児科外来まで勉強会ができていない」、セッション4-②18)「他職種もプレパレーションを理解していかなければならない」などのように、各施設において、参加者からの情報提供により病棟スタッフや医師の認識の変化がみられた。今後も継続して勉強会などの活動をすることや、プレパレーションの評価や医師や保育士などの他職種と協同して行う必要性を感じていた。小児病棟だけではなく、子どもに関わる外来看護師への働きかけの必要性も感じていた。

研究者から、総合病院で子どもの採血に関わる看護師の採血時の援助に関する認識について報告した。採血前の説明に、ツールが活用されていないことや、親を交えたプレパレーションが実施できていないことが明らかとなり、参加者の施設も同様の課題を持っている現状を理解することができた。前回配布した、テキストの資料を持ち帰っており、学生がプレパレーションを学び、そして就職してくる時代であることを再確認していた。また、病棟管理者へも報告しており、病棟におけるプレパレーションの必要性を認識してもらうこ

とができた。

IV. 考 察

1. 総合病院小児病棟におけるプレパレーションの現状

検討会に参加した看護師が勤務する総合病院小児病棟では、採血を受ける子どもへのプレパレーションや、手術を受ける子どもと親へのプレパレーションが主に実施されていた。採血に関しては、パンフレットはあるものの、プレパレーションが実施できていない実態が明らかになった。また、子どもの年齢に応じて医師が穿刺する場合と、看護師が穿刺する場合があり、本検討会に参加した施設では、看護師が穿刺できる年齢は4～6歳以上としていたがその根拠は明確ではなかった。また、採血時のディストラクションについては、親の付き添いを取り入れている施設では親が実施していた。採血などの侵襲処置を体験した子どもは、処置前の説明によるイメージ化と処置中の看護介入により安心につながられる（今西ら、2013）ことから、小児病棟におけるプレパレーションは重要である。本検討会で語られた内容から、採血を受ける子どもへ、採血前・中・後を通して支援できている看護師がいる一方、病棟全体として看護師のプレパレーションに関する認識に差があるため、方法が統一できていないことが明らかとなった。参加者の勤務施設はすべて混合病棟であり、子どもへの看護の統一の困難さが浮き彫りとなり今後の課題である。

一方、手術を受ける子どもと親に対しては、パンフレットを活用したプレパレーションが実施されており、プレパレーションの定義で示されているように（及川ら、2011）、子どもと親を対象としたプレパレーションの実施ができていたといえる。さらに、キワニス人形や医療玩具を利用することは、視覚的な媒体を用いて説明することに効果があるため（松森ら、2011）、子どもに正しい知識を与え、子どもの対処能力を引き出す援助ができていたといえる。

2. プレパレーション検討会の効果

本検討会は、A県内の総合病院3施設から、小児病棟の看護師が主体的に参加しており、プレパレーションに関心が高い参加者で構成されてい

た。参加者は、プレパレーションの必要性を強く感じているが、所属施設ではプレパレーションが実施できていないという、混合病棟における看護師の葛藤を抱いていた。子どもと大人の混合病棟に勤務する看護師は、子どもに対しては看護師のペースで看護が行われ、大人に対しては非常に気を使っていること、また、小児看護の専門性が深められず、看護に対して中途半端感を持っていることなどの困難感を感じている（草柳，2004）。藤田ら（2012）の研究では、全国の小児が入院する病棟がある総合病院において、子どもと大人の混合病棟は54.0%であり、総合病院の小児病棟の看護師は、子どもの権利を尊重した看護の必要性を感じながらも、子どもに向き合い、統一した看護を継続することに限界があることが推察された。

また参加者は、小児病棟のスタッフについて、プレパレーションへの関心が低いと感じており、看護師間のプレパレーションに関する認識に差が生じていることを日々感じていたと考える。そのような時期に、様々な施設が集まり、プレパレーションの現状や他施設の意見、研究者らの情報提供を得ることで、相互に働きかけができ、自己の施設で実施できる方法を見出す手助けになっていたと考える。本検討会では、研究者から子どもの権利およびプレパレーションに関する講義、親が付き添う子どもの採血場面のDVD視聴、子どもの採血に関する研究成果の報告、看護学生のプレパレーション講義について情報提供を行った。これらを毎回の検討会に取り入れたことは、参加者がプレパレーションに関する正しい知識を理解することにつながり、小児病棟の現状から自ら課題を見出すことができたと考える。また、参加者が所属施設のプレパレーションの現状に対して、何とかしたいという思いが語られ、研究者らと共にディスカッションできたことは、参加者自身が課題を見出せるよう導くことができたといえる。改めてプレパレーションの概念や研究の動向を学習することで、プレパレーションに対する意識が高い参加者の学びを深めることができ、自己の新たな課題を見出すことができたと考える。さらに、今回参加した施設から各1～3名の看護師が参加しており、今後所属施設において効果的に働きかける役割を担っていくと考え、各施設の病棟にも変化をもたらすと期待できる。

本検討会を通して、参加者の意欲向上が図れ、今後も継続して病棟での勉強会の開催などの活動を継続していきたいという認識の変化につなげることができたと考える。また、プレパレーションの実施後の評価や医師や保育士などの他職種との協同、小児病棟のみでなく子どもに関わる小児科外来の看護師への働きかけの必要性を感じることができ、各施設における今後の課題を見出すことができたといえる。

V. 結 語

総合病院小児病棟の看護師を対象にした検討会によって、以下のことが明らかになった。

総合病院小児病棟では、プレパレーションの必要性を認識し、実践できている部分もあるが、看護師のプレパレーションに関する認識の統一および、看護の継続には困難な現状がある。しかしプレパレーションに関心が高い参加者が、複数の施設から集まる検討会では、日々の看護をリフレクションし、他者とディスカッションすることで、参加者の意欲向上が図れ現状を把握することで今後の課題を明確にすることができた。

VI. 研究の限界と今後の課題

プレパレーションへの関心が高い参加者が、様々な施設から集まる検討会の開催は、参加者個人の意欲向上を図り、ひいては施設における効果的な働きかけにつなげることができる。そのため、子どもの処置が多い小児科外来に勤務する看護師への働きかけも今後必要である。本研究は、1年にわたり開催したプレパレーション検討会の内容であったため、今後も検討会を継続し、参加者を増やしていく必要がある。

謝 辞

本研究にご協力いただきました皆様に感謝致します。

文 献

藤田優一，石原あや，藤井真理子，他：全国の総合病院における小児の入院環境の実態調査，小児保健研

- 究. 71 (6) 883-889.
- 平田美紀 (2013) : 子どもの採血場面における親の付き添いに関する国内における看護研究の現状と課題, 人間看護学研究, 11, 31-37.
- 今西誠子, 阿南沙織 (2013) : 子どもの侵襲処置からの回復過程とその支援に関する研究—プレパレーション実施事例から—, 日本小児看護学会誌. 22(1), 122-128.
- 草柳浩子 (2004) : 子どもと大人の混合病棟における看護師の抱える困難さ, 日本看護科学学会誌. 24(2), 62-70.
- 松森直美, 蝦名美智子, 今野美紀, 他 (2011) : 手術を受けた子どもへのプレパレーションに関する親の意識, 日本小児看護学会誌. 20 (2), 1-9.
- 及川郁子, 田代弘子 (2011) : 病気の子どものプレパレーション, 中央法規出版株式会社.
- 鈴木美佐, 流郷千幸, 平田美紀, 他 (2012) : 総合病院外来で小児の採血に関わる看護師のプレパレーションに関する認知, 第32回日本看護科学学会学術集会講演集, 441.
- 鈴木美佐, 流郷千幸, 平田美紀, 他 (2013) : 総合病院病棟で小児の採血に関わる看護師のプレパレーションに関する認知, 第33回日本看護科学学会学術集会講演集, 520.
- 筒井真優美 (2011) : 研究と実践をつなぐアクションリサーチ入門 看護研究の新たなステージへ, 株式会社ライフサポート社.